

新装版 最後の伊賀者

司馬 遼太郎

この本は忍者を主人公とした短編集です。その中で「伊賀者」という小説が一番印象に残りました。豊臣秀吉がまだ羽柴筑前守と呼ばれていた頃のことです。伊賀の忍者達は、まだ物心も付かない3歳の頃に「子買い」に売られ、惨酷苛烈な修行を行います。その中でほんの一握りの子供だけが忍者になれるというのです。主人公・梅ノ源蔵は師匠・杉の坊の下で過酷な修行を耐え抜き、伊賀流忍術の名人として活躍し名を知られるようになります。ある時彼は大仕事を終え、五年ぶりに帰った故郷で、師匠の杉の坊が暗殺されたことを知ります。その上なぜか自分まで殺されそうになります。何とか助かった彼は仇討ちを決めます。下手人は兄弟子4人の内の一人としかわかりません。その内の一人が下手人だから次々に兄弟子を倒せばいいと考えたのです。「なんて乱暴な考え方なのだろう」と思いましたが、全員が暗殺に荷担していたので乱暴な考えとは私の早とちりでした。兄弟子達と一対一で戦いを繰り広げる場面はあつという間に決着がつくのですが、スピード感のある文章にいつの間にか引き込まれて、つい息を殺して読んでいました。主犯格を抹殺する為に茶人として時期を待っていた源蔵は、外見だけでなく中身も茶人になってしまつて兄弟子に返り討ちに遭い物語は終わります。人は住む環境でどんどん変わると思い、思わず姿勢を正してしまいました。

N
F



掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞